

南相馬視察ツアー（H27年5月16日）参加レポート

～被災から4年、南相馬の現状は？～

平成27年9月30日
一般社団法人レジリエンス協会
菊池謙三

I. 今回の視察目的および視察内容

目的：平成23年3月11日に発生した東日本大震災において、津波被害と原発事故被害が重なった南相馬市の被災時状況の一端と、被災後4年が過ぎた現在の復旧・復興状況を知る。

視察内容：

- ① 津波被災、原発事故被害の現況を知る。
- ② 寺内塚合第二仮設住宅訪問（藤島自治会長ほか）
- ③ 南相馬市立総合病院訪問（金澤院長）

II. 南相馬市の現況

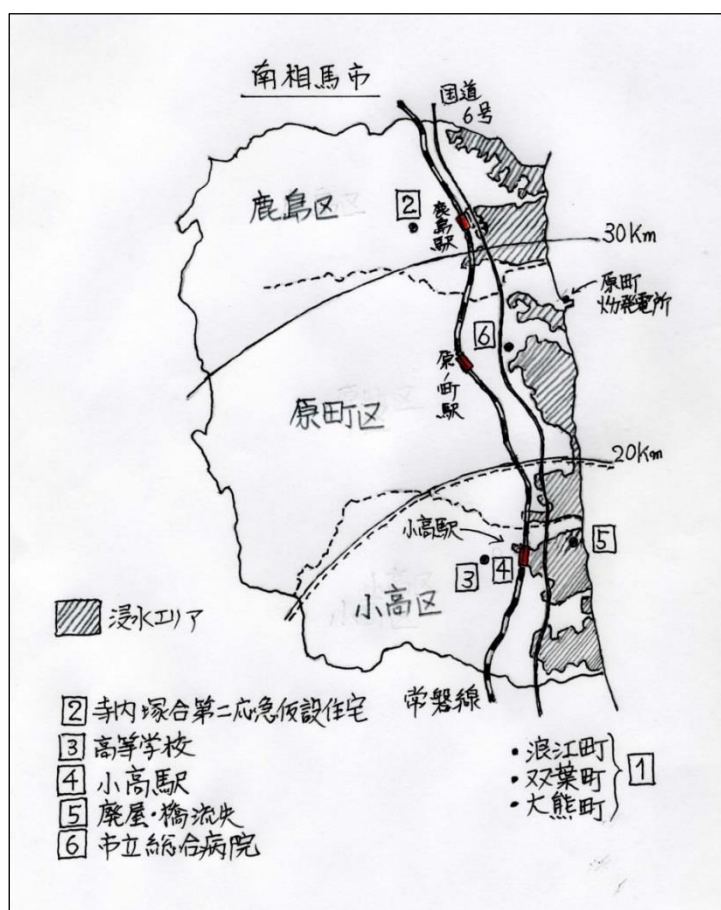
- 南相馬市は原発からの距離によって、もともとの3つの行政区にほぼ沿った形で3つのエリアに区分されることになっている。（下図参照）

〔福島第一原発から20km内〕

- ・小高区ほぼ全域が国の管轄地区。
 - ・非居住区—現在は昼間は家の片づけ・掃除等の入域可。夜は退去。
 - ・補償問題も含めこれからの地域。
 - ・家は壊してと申し出れば、費用は国負担で片づけられるとのこと。
- しかし、津波侵入地区の外縁部には、被災時のまま放置されている家も多数見られる。

〔20km～30km〕

- ・原町区ほぼ全域。
- ・居住可能地区。
- ・復旧・復興を目指している地区。
- ・この地区の住民には基本的に補償は終わっている。ただ、中途半端な補償だという声もある。



〔30km外〕

- ・鹿島区ほぼ全域。
- ・この地域の住民には基本的には何の補償もない。

図（数字）の補足説明

- 1 今回の視察は国道6号に沿って図の下側の大熊町、双葉町、浪江町を通過して南相馬市に入った。この通過の際の街道沿いの様子は次項に記載。
- 2 仮設住宅はほとんどが鹿島区に設けられており、一部原町区にもある。今回は鹿島区にある寺内塚合第二仮設住宅を訪問。
- 3 小高駅から津波浸水エリアに向かう時に地元高校の状況を車中より視察。
- 4 小高駅。駅前の状況については後ほど記載。
- 5 浸水エリア。ここの状況も後程記載。
- 6 市立総合病院。金澤院長 にお話を伺う。

※ 図中斜線一津波浸水エリア：その広さ・大きさに驚きます。

Ⅲ．視察レポート

1. 大熊・双葉・浪江町の現況

南相馬市に向かう途中、常磐自動車道を「常磐富岡IC」でおり、通行可能となったばかりの国道6号で「大熊町」「双葉町」「浪江町」を通り抜ける。「通り抜ける」というのはまさに言葉通りであって、許可をとらなければ停車していることはできない。国道6号線沿いの家や脇道の入口には柵が設けられており、入ることはできない。少し大きな道路の交差点には警備員が立って監視している。

（側道には柵が設けられて入れない）



- 道路沿いの家屋、商店、外食店、スーパーチェーン店、ガソリンスタンド等完全に無人であり、津波侵入エリアでは1階部分が完全に波で破壊された爪痕を遺している建物も多い。外食店やスーパー等は、破壊された1階部分の外側をベニヤ等で覆っているところもある。そして津波のなかったエリアでは、今まさに生活していてもおかしくない普通の家が並んでいる。



ただ、人っ子ひとりいない。まさにゴースト・タウンである。静寂につつまれた一部壊れた、あるいは非浸水地域では完全な住宅が並んだ街並みだけがそこにある。しかしそこは、ネズミその他の小動物の巣窟になっているとの事。道路際に立っている警備員の姿を見つけると「あ、人がいた」とホッとする感じさえした。

- 先程ふれたが、これらの3つの町、そして南相馬市の南側 1/3 は福島第一原発から 20 k m の範囲内であり、国の管轄エリアとなっており、基本的に個人では建て直し・改修等手が出せないことになっている。
- 国道沿いのところどころに除染作業中の旗が立っており、軽重機（ショベルカー等）と共に十数人が作業している場所がある。「除染完了」という札が下がった地域・駐車場も散見される。畑、たんぼであった所あちこちに、大きな黒い袋（フレコン；フレキシブル・コンテナの略；話では一個 1 万円位）が整然と数列にわたって並んでいる。また、人のいない家屋の庭先にもあちこちに 2 個、3 個とおかれている。すべて除染作業で出てきた、表土であると思われる。



道路際にところどころ線量計の表示がある。双葉町では場所によっては $2.4 \mu\text{Sv}$ （マイクロ・シーベルト）と表示されており、 $4 \mu\text{Sv}$ ぐらいあるところもあり、これは首都圏の 100 倍の線量であるとのこと。しかし、車の中で、しかも数十分間のことであり、基本的には全く問題ないレベルであるとの説明を受ける（だから 6 号線のこの部分も通行可能になっている訳だが）。

2.〔寺内塚合第二仮設住宅〕訪問

- この仮設はほとんどが元小高区の住民が入居している。自治会長の藤島さんと、高校生の母親である星野さんが迎えてくれた。昼食をとりながら、いろいろなお話を伺った。藤島さんは「フクシマ漂流記」という本も出版されている。興味のある方はぜひお読みください
- なお12万人が現時点でも仮設住宅住まいや、他県で暮らす等の生活をしている。



(以下、藤島自治会長のお話)

- 仮設住宅に現在残っているのは65歳以上が大半であり3世代が別れて暮らしている。若い人は既に遠くへ避難している状況。
- 仮設住宅は（視察時点では）来年4月に解除されることになる。地元に戻るのか、他の場所に家を作るか、借りるか、子供のところに行くのか、などの選択が求められることになる。

※解除は、その後変更されて再来年春までとなり1年延長されている。

- しかし、元の地区に戻ることは難しい。最近のアンケートでは「帰りたい」は20%程度である。さらに「帰りたい」と「帰る」は別で、実際に帰るのは10%程度あるかどうかという見方もある。



(藤島自治会長)

小高に戻るには、条件がある。隣り近所があるということである。小高の1万2千人のうちの10～20%ぐらいとなれば、1,000人～2,000人程度になる。それでは、帰還して生活を維持するのは難しい環境である。

- 仮設住まいで、夫を亡くされた女性が、遠くに避難している息子に「4月にどうしたらいい？」と聞いたら、息子に「復興住宅に申し込んだら」と言われたという話もある。本人はたぶん息子さんと暮らしたいのだろうが、息子さんは、それができる状況にない。
- 現在東電から1人月10万円の生活費が出ているが、仮設が解除されたあと1年で打ち切りになる。
- 4年間でこの仮設住宅で6、7人が亡くなった。全部男性である。男性は仮設環境に限らないが、近所の人付き合いに消極的であり引きこもる傾向にある。集会所にも女性がいると入ってこなくなる。そこで、集会所の前のところに喫煙所的なものをつくって、ひさし等をかけ「男のサロン」を作った。そこには男の人たちが結構集まって話をしている。こういう取り組みは、他の仮設ではあまり無い例だと思われる。
- 仮設ごとに入っている地区が必ずしも違っているわけではないが、この仮設は小高地区

がほとんどである。地区ごとに補償等の格差の問題もあり、異なる地区同志で少し感情的なわだかまりが出ることもある。だから、他の仮設と連携して何かやるというのは難しい。

□ 補償の格差の現実的な問題として、例えば病院や高速料金について言えば、鹿島区の住民は有料だが、小高区の住民は無料である。鹿島区の人間にとっては、何でその区別があるのかと、不満に思うことはあるだろうし、その話をしたら、おさまりがつかなくなる恐れがある。

□ だから、合同イベントを開催して別の仮設の人が集まることもあるが、うまくいっているケースは中間にボランティア等の第3者が入っている場合である。それぞれが主催したイベントには、呼びかけても相手側の仮設からの出席者はほとんどないというケースが多い。

□ 阪神大震災の時は、仮設住宅は1年半で無くなった。今回の東日本大震災では、4年たった現在でも12万人の避難者（漂流者）がいる現実を忘れてはならない。この違いの大きな原因は何かと考えると、結局原発事故の存在にたどり着く。確かに津波は甚大な被害を与えたが、それは、時間軸で見ると一瞬であった。しかし、原発事故は4年を経過した今でも20km圏に人が生活することを許さず、さらに今後どうなるかということもはっきりしていないという状況を作り出している。



(星野さん)

- 藤島会長も星野さんも、想像していたより屈託がなく、明るく対応していただいたが、内面は相当の苦労があるのだろうし、高齢者の多い住民のこれからの生活を考えると、大変な重圧もあるだろうと考える。
- 会長の話の中で、特に印象に残った2点をあげる。
 - ・時間とともに皆さんの震災に対する意識は薄れていくだろうが、まだ12万人の避難者がいる。何かして欲しいということではなく、少なくともこの事実を、私たちを忘れて欲しくない。
 - ・ボランティアはありがたい。しかし、その際に何か必要なことはありますか？という問い合わせではなく、私たちは〇〇〇ができますがいかがですか？と言っていた方がありがたい。
- 東日本大震災は ①昔もあった大地震・大津波 という自然災害と ②原発事故 というある意味人為的災害 の2つの原因による被害発生である、ということを改めて認識した。原発の影響のないエリアでは、順調とはいえないまでも、町をあげて復旧・復興に取り組んでいる姿が報道されるところもあるが、この原発から20km以内のエリアは復旧の第一歩すらおぼつかない状況であることがわかった。被災後まる4年以上経過してである。車中から、ところどころに見られた除染作業もその規模は小規模な感じは否めなく、大々的に取り組んでいるという印象は薄かった。

3. 仮設住宅から小高駅へ

● 鹿島区にある仮設を後に、いよいよ小高区の浸水エリアの視察に向かう。途中、6号線沿いからも浸水エリアの状況を見ることができた。埋めつくされていたであろう瓦礫はきれいに片づけられている。

● とにかく、浸水エリアの広大さに圧倒される。写真に見られるただっ広い草原と見られる場所、そこには間違いなく町並みがあったのである。草原の中にまっすぐ伸びる主要道路であったと見られる道の『歩道』(写真右)に違和感を覚える。



● 震災時にTVで津波の状況は何度も見て圧倒されたが、実際にその場に立つとその広大さは想像を遥かに超えている。高さ3mも4mにもなる海水が、この広い土地に押し寄せすべてを破壊・流し、満ち満ちていた事を考えると、あらためて驚愕を禁じ得ない。



● 海岸沿いに近づくと、他の場所（内陸部）では既に片付けられて見られなかった瓦礫の山が認められる。



〔小高駅〕

● 小高駅前の通りを抜けて駅に向かうが、通りの街並みは 駅・線路をはさんで津波の影響を受けていないため全く整然としており、人がいないのが不思議な感じがする。



上の右の写真は駅前通りから見た災害発生時に建築中であったと見られる家である。4 年間建築中断の状態そのままで残されていることになる。

- 小高駅の駅舎の右奥に自転車置き場がある。そこに鍵をかけられた自転車がずらりと並んでいる。これは大部分が高校生のもので、4 年前に登校のため駅に駐輪したまま残されてしまったものだ。4 年間放置され続けている自転車を見ると、それぞれの持ち主は今どうしているのかと想わざるを得ない。

(下右の写真) 駅前で民芸品などを売っているアンテナショップ「きら希来きら」。昼間だけ営業、退去エリアのため当然夜は閉店。店内には地元有志の手造り品や著作本類が並ぶ。募金の意を込めて土産に買う同行者もあった。



4. [小高の浸水エリアへ]

- 浸水エリアに向かう途中で高校の様子を視察。グラウンドは草が生えたまま。片隅の野球のバックネット前には除染で出たと思われる表土の入ったフレコンが積まれている。



- いよいよ小高の浸水エリアに向かう。

浸水エリアの状況は、文章でお伝えするよりも写真で見ていただいた方がより伝わると思うので、写真を中心に少しの説明を加える。



(左) 小高駅の反対側（裏側・海側）；駅舎側は前出の写真のように津波の影響は全く見られないが、線路をはさんで海側は津波による影響と見られる原っぱが広がっている。
(右) 少し小高い丘の道路沿いに、純粋に地震の影響による損壊と見られる民家があった。



- 小高地区の津波浸水地域。圧倒的なスケール感に圧倒される。テレビという小さな窓からのみ得られた情報に基づく想像は、全く現実とはかけ離れたものだった。現実にもその場に立った時の身震いするほどの圧倒感、そしてある種の絶望感。とても言葉では表せない



浸水域の周辺部の高くなった丘部分の裾には、一階部分が津波によって破壊された民家が残されていた。海水の流れが丘で止められたため勢いが弱まり、倒壊・流出されなかったものと考えられる。



(左) 根こそぎ波に持って行かれて土台のみ残された家。丘の裾の部分と異なり、平地（中央部）は海水の勢いが強かったと見られ家の形は残っていない。もっともこの平地は波が引いたあとはおびただしい残骸で覆われていたのだろう。

(上右) 家があった場所であろう。そこにただずんでいる老夫婦。何を思っているのだろうか。

いずれにしろ、これが小高地区の被災4年後の現状である。

(原発から20km圏内では墓参りの際に線香は禁止。カセットコンロのガスもダメー火気厳禁ーとのこと。)



(左) 土手の向こうは川。左方は河口。津波はこの川を遡上して両岸に流れこんだと思われる。遡上した津波は一瞬でコンクリート製の橋を流し去ってしまった。

(下) 流された橋のコンクリート・鉄筋残骸と見られる堆積物の山。



(下) 一階と、左側部分が津波被害にあった家。家の背面は少し小高くなっており、その上の家は津波被害を受けていない。

小高い部分に近い右側より家の左側の方が、波の流れが強かったと考えられる。家の左側部分は完全に流されて2階の屋根が落ちている。



5. 南相馬市立総合病院

● 市立総合病院に行き、金澤院長にお話を伺った。



(測定器の説明：金澤院長)

(左) セシウムの測定器。半年後の9月から導入したそうだ。対象者が中に入って測定する。周囲は外部からの放射線を遮断するために相当大きな装置となっている。内部被爆検診は初期600名程度には直接回答をしていたが、その後予約制とした。



(南相馬市立総合病院)



(左) こちらは小学生以下用の Baby scan。幼児・乳児等の中に入れて測定。2014.7~2015.3 の間に約 1,000 人を検診した。セシウムは子供の方が代謝が高い。また男性と女性では女性の方が代謝が早いとのこと。子供については、2012 年 9 月以降はセシウムの異常値の検出はない。



(右：金澤院長)

□ 発災時の状況についてお話いただいた。

- ・ 3 / 11 ; 地震発生。原発全電源喪失
- ・ 3 / 12 ; PM8:00 救急入口の所で $12 \mu \text{Sv/h}$
1 階エレベーターホールで $2.3 \mu \text{Sv/h}$
を測定した。

(セシウムやヨウ素は雨や雪が降ると土に吸着され舞わなくなる。乾燥しても空气中を舞うことはほぼなくなる)

1 号機の水蒸気爆発後若い入院患者 71 名を退院、転院させて原発から遠ざけた。

PM11 時過ぎ、自分の今後を決められない高齢の患者が病院に避難してくる。

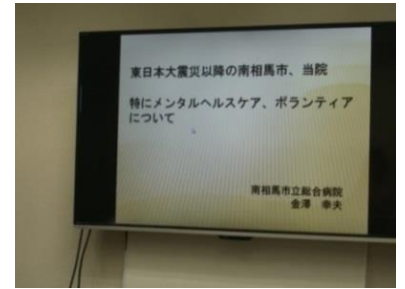
- ・ 3 / 14 ; AM11 : 01 3 号機水素爆発を起こす。237 人いたスタッフは 14 日現在で 190 名。院長はこの時点で病院に残るか否かはスタッフ各人の判断に任せることとした。スタッフは 15 日には 86 名になる。
- ・ 3 / 15 ; 20~30km 地域に屋内避難指示が出される。
⇒これにより物の流入が無くなる。人が立ち入らなくなる。ようやく県の災害対策本部と連絡がとれ、3/16 日自衛隊が食糧、医薬品を搬入
- ・ 3 / 15~18 ; バスによる市民の避難が始まる。
- ・ 3 / 18~20 までに入院患者すべてが避難を終える。
- ・ 3 / 21 ; スタッフ数は 57 名となった。(その後は増え 31 日時点では 126 名となる。)
⇒11 日の地震発生以来、とにかくブリーフ・ケアする時間も余裕もなかった。

□ 入院患者の避難について

- ・ 搬送中の死亡なしに入院患者 136 名全員を転院させることができた。
- ・ 16 名はヘリ搬送、76 名は陸路で 200km を超すような移動が必要であった。
- ・ 30km ラインまでは自衛隊にお願いし、そこから DMAT (災害派遣医療チーム) のお世話になるという形もあった。
- ・ 入居定員 80 名のある介護施設の例では、震災前の 5 年間の平均年間死亡者数 11 名に対し、3 月 19 日時点の入居者 79 名のうち 74 名が神奈川に避難したが、3.5 ヶ月以内に 20 名が死亡したと報告されている。

➡ 原発を抱えている県等の自治体は、一旦事が起こった際にこうした入院患者、老人、各種養護施設入居者等の「弱者」の避難をどうするかを平時から考えておかねばならないと話していた点が強く印象に残っています。

- 南相馬市は人口 71,561 人であったが、今は 50,800 人余りに減っている。
- 4/28 以降自衛隊と一緒に市内の家庭訪問を行い、動けない人を把握し 70 名程度をピックアップすることを行った。
- 仮設住宅は 5/28 から稼働、以降仮設住宅を訪問し健康講話等を実施してきた。2012 年 8 月からは、ラジオ体操も始めている。これは、男性を外に出すことも狙いの一つとなっている。2013 年 9 月には「男の料理教室」も実施、とにかく男性をいかに外に出しているような活動に参加させるかということに注力してきた。
- 被ばくには内部被ばくと外部被曝がある。内部被ばくには空気中を舞うプルーム（気体状の放射性物質）からの急性被ばくと食べ物からの慢性被曝がある。チェルノブイリの事故の際は食べ物（きのこ、動物等）からの被曝も多かったが、福島ではそういった食べ物からの内部被ばくは相当低いと言える。
- 自殺も大きな問題である。災害関連自殺者数は、はっきりしているだけで、いわき 8 名南相馬 7 名、福島 5 名、相馬 4 名の近隣エリアだけで 24 名にのぼっている。このうち 33%は 65 歳以上の高齢者である。若い人たちが子供と共に外に移住してしまい生活のはりを無くしてしまうことも要因の一つといえるのではないかな。



➡ 今後の地域活性化のための根本的な課題については、①仕事が必要 ②産婦人科、小児科の医療が必要 ③教育 の3つを挙げていた。女性が住みやすい地域にしたいという事です。結婚したら住む所は女性主導になる傾向があるのではないかとのこと。

- 誰も経験したことのない事を、皆経験してきている。つらい中で過ごしてきたが、震災は自分をリセットさせてくれた、という面もあった。これはある意味でありがたいことだったとも考えている。一番良かったことは南相馬という枠が壊れ全国の方と友達になれたことだ。2年間の研修医も受け入れることができ、またそれとは別に地域医療研修で1か月間南相馬を訪れる研修医が年間 17 名ほどになっている。2年間の研修を終え、当院に残ってくれる医師も出てきている。こうした広がりや医療友達のつながりに発展するかもしれないと考えている。
- 院長は最後に、「まあお酒を飲んで忘れましょう」という感覚と、「人の良い所だけ見ましょう」を心がけている、といって話を終えました。

➡ 入院患者を無事に他の病院に転院させた後のしばらくの期間は、院長が言われる通り、来院者も少なくほんの少しの休息の時間、リセットの時間であったのかも知れない。まさに“忙中閑あり”という状態なのかなと。

その後来所者、入院者、仮設への各種フォロー、研修医の受け入れ、そしてマスコミ対応とすごく多忙な中で4年間で過ごしてこられたのだなと感じました。マスコミに積極的に対応してきたことも実は、何とか医療スタッフを確保したいという狙いもあったのだとも伺いました。とにかく大変な中でいろいろなことに対処されてきたことに素直に「お疲れさまでした。そしてこれからがんばって下さい。」と思いました。まさに「まあお酒を

飲んで忘れましょう」は、いろいろ辛い事もあったし、これからも苦労はあるだろうけれど、「明日からまたやるぞ」という思いなのだろうと感じました。

《まとめ》

今回の視察で考えさせられた点は大きく3つあります。当たり前のことですが、一つはこうした災害に備えた事前の対応が必要だという事。二つ目は地域のコミュニティ再生に対するビジョンが必要だという事。そして最後に大きな問題である原発について少しだけ述べさせていただきます。

1、事前の対応について

今回の視察で種々の問題点が挙げられている。

- ・ 『原発を抱えている自治体は、一旦事が起こった時にこうした「弱者」の避難をどうするか考えておかねばならない』という金澤院長のお話は、今まさに原発再稼働の動きが進む中で、該当自治体が避難計画を考える際に抜かしてはならない重要な課題であると言える。
- ・ 同じく院長から、発災後であるが全国的な医療機関との繋がりが広がったという話があったが、いかにこの「医療友達の輪」を全国的に平時から構築しておくかも課題だと考えた。
- ・ またこれは仮設住宅の自治会長も院長もふれていたことだが、こうした際の男性の引きこもり傾向に対処するにはどうするかである。これはヒューマン・レジリエンスの一つの課題と考えることができるのではないだろうか。

2. 地域コミュニティ再生のビジョンについて

- ・ とりあえず一年延期されたが、再来年には仮設は解除（廃止）される。現在仮設にいるのは高齢者が多いが、この方たちは地元に戻るのか他にどうするかを選択を迫られることになってくる。まさに現在国の管理地域となっている場所が今後どうなるのか、どうなっていくのかの明確なビジョンが示されなければ判断のよりどころがないことになる。地域再生のためにも皆さんのコミュニティはこういった形での構築を目指しており、そのためのロードマップはこうなっています、ということの明示が必要ではないかと考える。地域住民の考えを聞くことも必要であるが、非常時である。国・自治体がリーダーシップを持って、どうしていくのか、そのために今の段階から何をしていくのか（皆が帰れる環境をどうつくるのか）を明らかにすることが早急に必要であると考え。真にこの地域のことを考え、こう再生するのだという強い意思で進める組織・人がなければ、このエリアの先行きはいつまで経っても不透明のまま時間だけが過ぎていくような気がする。

3. 原発について

- ・ 今まさに、原発再稼働の動きが始まっている。原発のメリットはランニング・コストが安いと言われている。しかし、原発建設のイニシャルコスト、安全性確保のための

種々のコスト、既に大きな課題となっている適切な核廃棄物処理のコストに加えて、地震大国であるわが国において今回のような事故が起きた際の膨大なコストを考えると果たして本当に安いのだろうかと考えざるを得ない。一旦事故が起きればとても一企業が負いきれるものではない。安全性の観点でも最終的にはそれぞれの企業に任せるとするのは不安が残る。

- ・ 国策としての原発（推進）があるならば、採算を度外視した国の事業として国が責任を持って管理・運営していくしかないのではないだろうかとも考える。民間ではどうしてもコスト優先になりがちなのは否めない。
- ・ 原発事故被害の現状を目の当たりにして、原発問題は国のリスク管理の視点から十分に検討しなければならない重要な課題だと感じた。

（あとがき）

南相馬市立総合病院をあとに南相馬 IC から常磐自動車道に入り東京に向かう。高速道路からも除染作業を行っている場所が散見される。最後に車中で参加者の感想を述べ合ったが、皆さん大変有意義なツアーであったと思われたようでした。私も今まで現地を訪れることをせず心苦しく思っていたましたが、その点は今回参加して少しだけに気持ちが楽になったような気がします。しかし想像を絶する現状は新たな課題を突き付けています。今後それらの課題を具体的にどうしていくのかが問われていると考えました。

最後に、貴重な時間を割いてお話いただいた藤島会長、星野さん、金澤院長、現地で案内していただいた長谷川さん 松本さん、そして今回のツアーを企画していただいたデジタル・ストーリーテリング研究所の須摩修一さんとレジリエンス協会の深谷さんに感謝申し上げます。また一緒に参加したレジリエンス協会の徳田さんや他の参加者の皆様にも、同行させていただき貴重な体験を共有させていただく機会が与えられましたことに感謝申し上げます。

（終わり）